東方～気楽な転生者の弟子 お節介な魔法使い

生徒会長月光

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気楽な転生者こと出雲祐希。

彼には何人か弟子がいる。

これは彼が幻想郷に行った時に数年ほど魔法を教え、それら全てをすべて吸収した弟子の話である。

本来であればその魔法使いは親友の巫女に勝てず日夜試行錯誤を繰り返し弾幕ごっこをするものの勝てずその繰り返しであった。しかしこの世界の魔法使いは何の因果か同い年であったはずの巫女よりも２年近く早く産まれた。それにより本来は会わなかった筈の出会いをする。そして今日も彼女は幻想郷を巡る。その顔に笑顔を浮かべ人を喜ばせるために。

Ｐｉｘｉｖにもマルチ投稿してます。

目　次

お節介な普通の魔法使い ―――― 1
番外編　バレンタイン ―――― 7

お節介な普通の魔法使い

お節介な魔法使いその名は？

よっす。先生の弟子の一人お節介な普通の魔法使い、霧雨魔理沙だ。

先生って言うのは私に魔法とはなにかを教えてくれた人で出雲祐希っていうんだ。

厳しくも私に色々なことを教えてくれた人だ。そんな私は魔法の修行と研究をもっぱらやっている。今回は試しに作ってみた、ラッキー薬をあの娘に飲ませてやろうと思ってる。この薬は一日一回本人にとってラッキーなことを運んでくれるものだ。但しそのラッキーはピンきりで１００円拾ったやアイスの当たりが入っていたなどの小さなことから、不治の病が治るや宝くじで一等が当たるや妖怪に襲われないなど不安定な効き目だ。効果は大体３～５日ほど続く。大体飲んでもらった人たちから聞くにはアイスの当たりや１００円拾ったなどである。

早速神社に出発だ。

箒に乗りあの娘の住む博麗神社に向かう。その間に先生が作ってくれた、四次元バッグに自家製の野菜と果物を入れる。

あそこに住んでる親子はマイペース過ぎて時折ご飯さえ食べないときがあるくらいなのだ。誰かがいかないと倒れてたなんてこともある。

前にスキマ妖怪が大慌てしてたので、落ち着けてご飯を食べさせてからは何日かに一回は様子を見に行くようにしている。

そして暫く飛ぶと博麗神社に到着した。

「おーい。霊夢。魔理沙お姉さんが来たぞ。」

「うるさいわよ。魔理沙。」

「固いこと言うなよ。霊夢。私たちの仲じゃないか。」

「掃除の邪魔だからどっか行ってて。」

「折角昼飯持ってきてやったのにそうか入らないのか。それなら、」

「何してるの魔理沙。早く入りなさい。」

「相変わらず、現金なやつだな。」
　そうして中に入ると、卓袱台の上で呑気にお茶を飲んでいる霊夢の母親で先代巫女の博麗有希がいた。
「有希さん。こんちは。今日も昼飯持って来たぞ。」
　ペコリと此方に礼をする先代巫女。彼女はとても無口なためめったに喋ったことがなく、その表情から何を言わんとしているかを理解しないといけない。
　スキマ妖怪でさえ何を伝えたいか解らないことがあるらしいが、案外表情を見ると分かりやすく、私の母さんは何も喋ってなくても大体言いたいことが分かるらしく、それの影響か今では私もそれなりに言いたいことが分かってきた。
　先程の行動は、いつもありがとうね。霊夢も私も助かってます。何もないけどお茶をご馳走するわ。という表情をしていた。
「今日は何を持ってきたの？」
「まぁ慌てんなよ。今日はみかんとリンゴ、あとじゃがいもと今朝採れたばかりのキャベツときゅうりを持ってきたんだぜ。」
「そうなのね。肉とかはないの？」
「この間大量に持ってきたのはどうしたんだぜ？」
「私と母さんの二人よ。そんなの食べきったに決まってるじゃない。」
「しまったな。今日は持ってきてなかったんだぜ。」
「どうすんのよ　私はまだ野菜とかあるから良いけど母さん絶対足りないわよ。」
「じゃがいもがあるから何とかおかずを作るさ。有希さん台所借りていいか？」
　コクンと頷き目をキラキラさせてみかんに手を伸ばす。
「それじゃ暫く待っててくれ。霊夢、油はまだあったよな。」
「ええこの間持ってきてくれたのがまだあるわよ。」
「じゃあ今から作るぜ。」
　そう言って魔理沙は台所に行く。まずは米の貯蔵を確認しまだあったので、１０合ほどバッグに入れといた鍋で炊く。鍋にはちょうど言い感じに炊けるように魔法をかけてあるから焦げる心配はない。

そして魔理沙は自分の帽子から調味料を出す。更に四次元バッグからオリーブオイル玉ねぎバター魔法の森で採れたしいたけ、小麦粉、卵とパン粉、牛乳を出す。

まず、じゃがいもは細かく切ってラップをし保護魔法をかけて９分加熱する。玉ねぎとしいたけはみじん切りにしてフライパンにオリーブオイルを熱し、玉ねぎとしいたけを炒める。温めたじゃがいもを加え、弱火で水分を飛ばしながらフォーク等で潰す。

バター、ウスターソースと牛乳を加えて混ぜる。一度バットに移して粗熱をとり、形成する。

小麦粉、溶き卵、パン粉の順でつけて１７０度の油できつね色になるまで揚げればじゃがいもコロッケの出来上がり。

火加減は自身の持つ八卦炉でやっているので焦げるといったこともなく、どんどん作っていく。

そしてある程度作り続けると、最近感じた力の波動が真横に来たので、話しかける。

「つまみ食いなんて妖怪の賢者がすることじゃないんだぜ。」

「あら、別に良いじゃない。そんなに沢山あるんだから。」

「いやこれだけあってもあの親子ならすぐに平らげちまうぜ。」

「……そうね。有希は物凄い食べるものね。あの娘、この間人里でやってた大食い大会でぶっちぎりの食べっぷりで優勝してたのよね。」

「あぁ。あの大会か。確かオムライス早食い対決だったな。」

「ええそうよ。あの娘１時間の制限時間内に６キロ食べてたそうなのよ。」

「相変わらずの食欲なんだぜ。」

「そのあと、貴女の母親のところでお団子を食べてたのよね。」

「この前いたのはそういうことだったのか。」

「貴女の母親、真理亜は有希のこと誉めてたわね。普通あんなに食べてたら呆れるぐらいなのに。」

「母さん、昔から有希さんのこと好きだからな。」

「有希のことをみて怖がらずに今も交流があるのは真理亜ぐらいよ。

あの娘は歴代でも三本の指に入る強さ。格闘戦もさることながら弾幕にも精通しているまさに博麗の巫女のスタンスを体現しているわ。」
「まぁ、確かにそうだな。でも私にとっては母さんの親友で霊夢の母さんってだけだからな。それに母さんの前だと有希さんいっつも笑顔だぜ。」
「……私は幻想郷のためにあの娘にいつも無理をさせてしまってたわ。今は引退してから、人里で依頼を受けることもある。今は少なくなったけど昔はあの娘を見る目は恐怖や畏怖をもっていた。私はあの娘に孤独を背負わせていたわ。そんな時に貴女の母親、真理亜に会ったの。そこからあまり笑わなかったあの娘は笑うようになったわ。妖怪である私ではどうしてもなれなかった、友達ができたのは。それからあの娘は孤独ではなくなって今では霊夢もいて普通の人として生きていられる。それも貴女たち親子のおかげだわ。だからこれからもあの娘たちのことをよろしくね。」
「わかってるんだぜ。何せ霊夢は私にとっては妹みたいなもんだからな。あと紫は少し気にしすぎなんだぜ。有希さんこの前珍しく喋ってな。お前が来ないのが寂しいって言ってたんだぜ。たまには顔を見せてやれって。母さんも紫は有希の母さんみたいなもんだから顔を見せろって言ってたぞ。ボソッ……魔導銃持ちながら」
「……そうね。そうするわ。それじゃまた来るわ。」
「帰る前にこれ持ってってくれ。」
「あら良いの？」
「まぁ、沢山作ってたからな。藍と橙にも食わせてやってくれ。玉ねぎは抜いといたぞ。」
「ありがたく貰うわ。それでは」シュゥーン
スキマを閉じてそのまま帰っていった。
紫も不器用なやつだって母さん言ってたしな。それにしても今度母さんに会うとき魔導銃向けられなきゃ良いけど。母さんホントに有希さん好きだからな。
大皿に作ったコロッケをどんどんのせて持っていく。さらに採れ

たばかりのキャベツも沢山のせる。あとは味噌汁も作り終えたので持ってくだけだ。
「出来たんだぜ。霊夢卓袱台の上片付けてくれ。」
「わかったわ。」
「よいしょっと、さてとご飯も持ってくるから少し待ってくれ。」
　と急いで米が炊けた鍋を浮遊魔法で持ってく。早くしないと二人ともご飯ない状態で食べちまうからな。そして
「「いただきます。」」
　１０人前は作ったコロッケを凄い勢いで有希さんと霊夢は食べていく。私は適度に食べながら二人の茶碗が空になったらご飯や味噌汁も追加していく。
　そうして数十分後には空になった皿だけとなった。
「ご馳走さまでした。相変わらず魔理沙のご飯は美味しいわね。」
「コクン」
「二人とも満足してくれてよかったぜ。片付けもやっとくから、霊夢は修行少しぐらいするんだぜ。」
「修行は面倒くさいからいやよ。あと片付けは私もするわ。」
「手伝ってくれるなんて、お姉ちゃん嬉しいな。」
「誰がお姉ちゃんよ。まったく。ほら早く片付けるわよ。」
　そうして片付けも一段落して当初の目的を思いだし帽子からラッキー薬を出す。
「霊夢。これやるよ。」
「何この怪しい薬？」
「ラッキー薬っていうものさ。一日一回本人にとってラッキーなことを運んでくれるものだ。効力は大体3～5日ほどだ。」
「そっ。まぁ無料で貰えるものは貰っとくわ。」
「今度効き目を教えてくれ。」
「ハイハイ。」
　それから修行を嫌がる霊夢を外に出して有希さんに修行をつけてもらう。
　有希さんにはまだ霊夢と二人で戦っても一度も勝ててない。しか

し今回こそはと挑む。
結果はいつも通り、負けちまったがそれでも実力は上がってると思うのだがまだまだ有希さんの領域には届いていない。
因みに母さんは有希さんと互角に渡り合うことができるそうだ。私も直接見た訳じゃないから何とも言えないが幻想郷屈指の実力者である太陽の畑の主人や紫も口を合わせて互角と言っていたから本当のことなんだろう。
そうして私は夕方になる前に家に帰ろうと境内で箒に乗る。
その後ろから霊夢も歩いてくる。
「じゃあ一応保冷魔法で野菜とかは何時ものところに置いていたからな。面倒くさがらずに食べるんだぞ。」
「分かってるわよ。ほらあんたも早く帰りなさい。」
「じゃあ霊夢また来るぜ。」
「ええまたね。……姉さん。」
「！あぁまたな。」
そう言って私は自分家に帰る。
今日も私は幻想郷を駆け抜ける。
困ってる人に手を伸ばすお節介な魔法使いの軌跡は続いていく。

???
何時になったら私は外に出れるのだろうか。あいつは私の能力を危険と言った。周りを傷つけると言い暗いここに閉じ込めた。メイドが食事を持ってきてくれるが、それ以外は私は一人だ。
あぁハヤクハヤクダレカコナイカナ
誰でもいいから遊んでほしいな。壊れちゃったらまた新しいのが来るまで時間掛かっちゃうからゆっくり遊ばないと。
アハッアハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ
……ダレカタスケテ。

番外編　バレンタイン

バレンタイン

今日は年に一度の行事バレンタインデーである。本来は男性から女性へと送る物であるが幻想郷では常識に囚われないのか女性から女性へと普通に送っている。

久し振りなんだぜ。お節介な魔法使い魔理沙だぜ。

今日はバレンタインデーで人里でもバレンタインキャンペーンで買い物をするとチョコがおまけで付いてくる。

家の実家でもバレンタインキャンペーンをやっていて父さんと母さんだけだと手が足りないから私も手伝いをしている。

更に今回は有希さんと霊夢の二人ともう一人が一緒に手伝ってくれている。人里の皆も博麗の巫女二人の姿を見るために足を止めて美味しいチョコの匂いに引かれてそのままチョコを買っていくので売上がどんどん伸びていく。

そうしてピークを過ぎて人が疎らになり父さんたちだけで大丈夫なようになり私達は休憩することにした。

「今日は皆手伝いありがとう。これ良かったら食べてね。」

母さん特性の一口チョコが沢山出てきた。

「ニコッ」

「真理亜さんありがとう。美味しく頂くわ。」

「良いのよ。今日は皆に手伝ってもらって助かったもの。これぐらいはさせてちょうだい。」

そうしてお茶を皆へと配る。

「貴女もありがとうね。中々幻想郷だと色々なチョコの作り方なんて本とかにしかのってないから本場を知っている人がいると作業効率が違うわね。」

「いえ…真理亜さんの手際が良かったからですよ。まゆなんてそんな…」

「そんなことないわ。まゆさんの的確なサポートがあったから色々なチョコを作れたんだからもっと自信を持ちなさいよ。」

「コクン　グッ」
「そうだぜ。母さんだけだったらこんなに沢山用意なんてできなかったんだぜ。これもまゆさんがいてくれたお陰なんだぜ。ありがとうなんだぜ?」
「そんな私のお陰だなんて…そんなに誉めても…チョコしか出ないですよ。」
ともものすごい数のチョコを出す。
紹介が遅れたんだぜ。今ものすごい数のチョコを出したのは東風谷まゆさんだ。
ついこの間妖怪の山に引っ越してきた守矢神社の風祝東風谷早苗の母親なんだぜ。
外の世界で身体がそこまで強くなく、早苗が産まれてから特に体調を崩しがちでこっちに来たときも寝込んで神社にいたんだぜ。
幻想郷に来てからはこっちの空気があったのか徐々に体調も良くなってきて、今では私の実家で手伝いをするようになって、儚げな薄幸美人がいると噂になり益々繁盛してると母さんが言ってた。

能力は収納する程度の能力。
物であれば何でも収納することができて荷物など沢山有ってもまゆさんがいれば安心なんだぜ。
あっちだと体調を崩しがちなせいか友達もあまりできなかったみたいだけど、こっちに来てから母さんや有希さんと友達になったり他の妖怪とも友達になったそうだ。
たまに永琳先生の所で薬をもらったりして体調に気を付けているみたいなんだぜ。
そうして大量にあったチョコは有希さんがほぼ一人で平らげた。
見ただけでも1キロはあったチョコを楽々平らげるなんて流石なんだぜ。
「魔理沙ちゃん…これ…いつもお世話になってるから。」
「?あぁありがとうなんだぜ?」
「今度感想を聞かせてね。」

「真理亜さんと有希さんと霊夢ちゃんにも…いつもお世話になってるからこれ。」
「ありがとうね。」
「ペコリ」
「まゆさん悪いわね。頂くわ。」
そうしてみんなチョコを貰ってそのまま帰宅することになった。最後ら辺まゆさんが小さく何か言ってた気がするけどまぁいいか。
帰る間際に霊夢が投げやりに投げてきたからなんだと思ったらちょっと大きい箱をを渡してくれた。中身は帰ってから見て欲しいとのこと。有希さんも母さんにマカロンを渡していた。その後母さんに抱きしめられていた。
帰ってから箱の中身を空けると、バームクーヘンが入っていた。その後美味しく頂いて次の日に感想をいったら顔赤くしてたな。ちなみに私は普通のチョコをプレゼントしたんだぜ。にしてもまゆさんから貰ったマカロン、何か変な味がしたような？

まゆｓｉｄｅ

ふふ初めましてですね。
東風谷まゆと申します。この間、早苗ちゃんと神奈子様と諏訪子様と一緒にこちらに来ました。私自身あまり身体が強くなくていつも体調を崩して家族に迷惑を掛けてしまいがちでした。
夫となった人も家で決められた人と一緒になっただけでそこに愛が有ったわけではなかったです。早苗ちゃんが産まれてからは別居していました。
それから早苗ちゃんを育てながら生きてきて、それでも私の体調は悪くなる一方で、こちらの世界に来るときは私の身体はボロボロで立てないほどでした。
早苗ちゃんには心配を掛けないようにしていましたが、神奈子様、諏訪子様それに私はもう長くないと思っていました。
そんな時でした。
私のところに魔法使いさんが来たのは。
その魔法使いさんは私と話をした後、一粒の薬を渡してくれまし

た。
それを飲んでから私の生活はガラリと変わりました。老い先短いと思っていたら体調が良くなったり、良いお医者さんが病気を治してくれたりと今までの不幸がなかったかのようです。
だから私はあの日会った魔法使いさんに恋をしたのでしょう。最初は戸惑いましたが早苗ちゃんは幻想郷では常識に囚われてはいけないとの言葉で色々吹っ切れました。
今では体調も良くなって人里で知り合った親切な方の所で（後に知ったのですがあの日に会った魔法使いさんのお母様だったようです）働いています。
先代の博麗の巫女さんとも知り合って異変でご迷惑をお掛けしてしまったこともあって仲良くできるかと心配でしたが凄い優しい方でお料理をご馳走したら仲良くなりました。
そんな訳で私の幻想郷での生活は充実しています。
まだまだ私の気持ちを伝えるのは早いと思うので、まずは外堀を埋めつつ私の気持ちを伝えたいです。
彼女は右の指に巻いた包帯を見ながら思う。
それにしてもまゆの作ったマカロン食べてくれたのでしょうか？
隠し味に入れた
私の血が入ったマカロンは。
ウフフフフ。